



中国短編小説集 一一七

春秋梅菊

意の誌 刊行

## お題目

---

お題目 註…括弧内は時代とジャンルです

<small>だんじょう</small> 壇上 <small>あくい</small> の悪意（現代）	……………2
他人に詩を見せることなかれ（唐代）	……………21
遺民記（明末清初）	……………30
おまけ 超超超中国小説史略	……………37
あとがき	……………39

遺民記

なんじゃ、つまらん。

わしはそう思った。友人——そんなものとは呼べるかもわからない隣人の張<sup>ちよう</sup>じいさんは、珍しくわしに一つの話を持ちかけてきた。

くそつたれ。何かと思えば、仕官の口が見つかったと言うじゃないか。そりゃ仕官はいい。どんな老いぼれだって金と名誉を手に入れるつてにはなる。子供は三世先まで栄えるかもしれぬし、人の尊敬も集まるじゃろう。

だが張じいさんよ。お前は少しだって考えたのかね。その朝廷は一体どこのどいつが治めてる朝廷だ？

もう何十年昔かもしれないが、わしは片時だって忘れたことはない。奴らは北に住んでいた蛮族じゃ。ないか。清なぞという国は、わが明国を侵して立てた国だ。みんなどうして忘れちゃったんじゃ。

わしは覚えとる。いつ忘れっぽくなったと言うんじゃ。

よし、張じい。せつかくだから聞いていくがよい。久しく話していない、この嚴<sup>げんろうじん</sup>老人の話をや

。わしは<sup>ぼんれき</sup>万歴四十年の生まれ、その時既に我が国は黄昏の兆しがあった。帝は後宮で遊蕩にふけり、政務には目もくれぬ。その間に政界は腐り続け、ついにはかの悪党<sup>ぎちゆうけん</sup>魏忠賢に牛耳られる次第じゃ。

わしの父は地方官であり、かの<sup>とうりんしよいん</sup>東林書院の人士であった。つまりは忠君の烈士じゃ。その父の背中を見て育ったわしも、やはり父の質を幾分かは受け継いでいたといえる。いやそれだからこそ、わしはいつも中途半端な人間になってしまったのじゃ。戦うときにためらい、踏みとどまるべき時に前へ出る。思えば、そんなことばかりだったかもしれん。

その後万歴、<sup>てんけい</sup>天啓と相次いで帝がおかくれになる中、わしは勉学に励んだ。しかし悲しいかな、まったくもって悲しいかな、わしがついに及第した時、国は既に滅亡の真っ直中にあった。国はあたかも内憂外患、内には逆賊<sup>りじせい</sup>李自成の反乱があり、また外では満人が虎視眈々と中原を狙っておる。逆賊達がいよいよ京師を陥落させるや、<sup>ごさんけい</sup>呉三桂の手引きによって満人は鉄壁の守りを誇っていた<sup>さんかいかん</sup>三海関を突破し、瞬く間に逆賊李自成を打ち破ると、続いて中華の地を侵し始めたのじゃ。逃げ延びた帝と遺臣達は転戦を続けましたが陣容整わず、ばらばらに滅ぼされていった。この日から、国土は地を引き剥がされるかのように荒らされ、人々は首を失い起きあがれなくなった……。

### 壇上の悪意

またしても「大会」の時間がやってきた。

こうべを垂れて壇上を歩いていた文峽<sup>ウエンシア</sup>は、ちらりと視線を横に投げた。

白江<sup>バイジアンチエン</sup>鎮の広場には、百人近い人々がぎゅうぎゅう詰めに押し込まれ、固唾を飲みながら集会の始まりを待っている。それはいかにも息苦しい光景だった。人々の顔色からは、声ならぬ声が聞き取れるかのようだ。明かりといえば頭上にたたずむ月光と、壇上の左右に掲げられた照明だけだった。

文峽は「悪質分子・反革命劇脚本家」と書かれたプラカードを首にかけられていた。壇上の真ん中近くまでくると、背後から二人の男に押し込まれ、その場で膝を屈した。

ここに立つのは、今日で三回目だ。彼の誇りや尊厳は、もう燃え盛るのをやめて灰になっていた。最初この壇上に連れてこられた時の屈辱は、思い出すことすら出来ない。

——いったい、今日はどんな責め苦に遭うんだ？ いっそひと思いに死ねれば楽だろうに！

だが、今の彼が死を以て何を照明出来るというのか。人々にしてみれば彼の命など犬の糞も同然で、何の価値もない。

この吊るし上げは、もう一年以上も鎮の習慣となっていて、あえてこれに反対する者もいなかった。プロレタリア文化大革命の波は全国に広がっている。ここで起きていることは、決して他の場所にしても珍しいことではなかったのだ。

ほどなく、彼の同類がもう一人、壇上に上がってきた。彼の知らない、若い女だった。年の頃は彼より三つほど下、二十六、七といったところか。もとは大層綺麗な女性だったに違いない。だが今は見る影もなく、髪はばさつき、手足は醜い痣の跡がくっきり残り、歯に至っては数本欠けている。プラカードには「反革命分子」の五文字が毛筆で書かれていた。

女は後ろ手に縛られており、口元を真一文字に結んでいた。彼女は文峽の隣に膝をつき、小さく俯いた。その弱弱しいシルエットを見て、彼は思わず憐憫の情がわいた。

鎮の革命委員会を指揮している劉<sup>リウ</sup>班長が、群衆に向かって声を張り上げた。

「この女は、今朝方我々の村に逃げてきた造反分子である！ 社会主義を捨て走資派に転向した、許されざる悪質な存在である！ この女をいかに打倒するかは、賢明なる同志達の判断に任せることとする。以上！」

人々は万雷の拍手で劉班長の言葉に答えた。文峽は思わずため息を漏らし、すかさず彼を壇上へ引っ張ってきた男に背中を蹴られた。

「こらっ、造反分子がため息などつくでない。許されると思うてか」

人々の中から、一人の女が立ち上がった。文峽はその女を見て顔をしかめた。鎮の皆は彼女

を「あばたの秦<sup>チン</sup>」と呼んでいる。外見ばかりか、中身まで醜悪な女だった。鎮の人々は等しくこれを嫌っていたのだが、プロレタリア文化大革命が始まるや否や、あばたの秦は皆の先頭に立って革命運動を推進し、これによって党の後ろ盾を手に入れた。近頃はその演説っぷりにも磨きがかかり、いよいよ取り巻きを囲うほどにまでなっている。おかげで村の人々は、彼女に告発されて吊るし上げにあうことを恐れ、ひたすら近づかないようにしている。

「劉班長！ その女にはただちに自己批判をさせるべきです。革命への裏切りは大罪です。何としても叩かねばなりません！」

劉班長はうむ、と頷き、壇上の女に向き直った。

「反革命分子、謝留雪<sup>シエリウシュエ</sup>。お前の罪は何だ」

## 他人に詩を見せることなかれ

---

他人に詩を見せることなかれ

り  
李先生

先日のお話にまだご返事をいただいておりますので、こうして再び手紙をお送りする運びとなりました。

近頃は長安の街において、もっぱら詩の会が開かれているのは先生もご存知のことかと思われ  
ます。先日、王都護おうとご（都護は官職名）が遠路遥々西からお帰りになり、わたくしが李先生についてお話ししたところ、是非一度お会いしたいとのことでした。

王都護は今月の暮れには任地へ戻られるそうなので、何卒急ぎ返事をいただけませんでしょうか。

拝具

しょう  
菖殿

拝復。答えるべきを答え、答えざるべきを答えず。お返ししなかったのはそういうわけです。

草々

李先生

またしても手紙をお送りする事態になったことを、先にお詫び申し上げます。

王都護の件に関して、わたくしの口からも再三、李先生がお越しになれないとお伝えしたのですが、王都護の李先生への興味は尽きず、三顧の礼も厭わぬとのことでございました。何卒、次の会にご来駕たまわるべく、厚かましくも三度目の手紙を差し上げた次第です。ご再考くださいますよう。

再拝

菖殿

貴君とは挙人の同僚でもあるゆえ、顔を立てたいのはこちらとしても山々ではあります。ありますが、小生は平生、長安で開かれている詩の会に対してもっぱら嫌悪を抱いてやみません。一つには、詩の造詣が深くも無い挙人や貴族が世間の流れに乗って、ありもしない教養をさもあるかのように見せかけ、作詩を繰り返している。みっともないとは思いませんか。皆様ご身分のあるお方々ゆえ、周りの者達も怒りを買うのをはばかり、あえて真面目に詩を論ずることもしないことでしょう。

第二に、王都護は西域の国境で国の防備に勤めているお方、長安の安穏な気風は馴染みますまい。王都護はこの長安の地で詩を学ばれ、任地へ教養をお持ち帰りになるおつもりなのでしょうか。国境で詩をたしなむ暇があるとなると、国の防備とはそれほど楽なお役目なのでしょうか。無論、久々に都へと戻られた王都護のご心情を察すれば、羽目を外すのは致し方の無いこと。しかし小生はつまらぬ身分に加え、ものをはっきり口にする悪癖もあるゆえ、席を共にすれば王都護の機嫌を損ねましょう。ゆえにお断りしたまでのことであります。

拝答

菖建しょうけんはこの返事を見て、いよいよ駄目だと思った。

——李先生は相当にご立腹のようだぞ。

王都護には諦めて貰うより他は無いだろう。しかし何と言ったものだろうか。王都護があそこまで李尉に執着する理由もよくわからない。同郷の人だと言っていたから、もしかすると面識があるのかもしれない。しかし李尉りいの手紙には、別段そのようなことも書かれてはいない。

菖建は李尉と同じ年に及第した同僚であり、李尉の方が歳も上で教養も持ち合わせていたため、彼のことをひそかに教師として仰いでいたのだった。それほど深いつき合いはないものの、李尉が詩をたしなんでいることは前々から知っていた。が、彼の作品そのものはまだ目にしたことがない。

目下、長安は詩を作るのが流行っていた。貴族や学識のある身分の方々が何かにつけては詩を争うように作り、家の前ついでんに対聯として飾ったり、城壁へはりつけたりしている。

この流行に対する長安の人々の反応はやはり様々であった。張九齡ちようきゆうれいや孟浩然もうこうねんといった大家達はこうした情勢を苦々しく思っていると聞かすが、さすがは大家らしい泰然とした構えで、何も気にすることは無いというようにふるまっている。

うるさいのはむしろ、詩を学び始めてそこそこになるような人間達だった。彼らは林檎を僅かにかじっただけでもう全てを食べ尽くしたような気になり、あちらこちらで誰その詩がいいのだ、誰そのは趣に欠けるなどと、小難しい顔で言ってみせる。まったくもって、憎らしいと言うほかは無い。それに拍車をかけているのが、詩を知らない人達である。とりあえず身分の高い者が書いたなら、それはもうありがたみのある代物であるかのように、貧相な麗句で褒めに褒めちぎる。そのようにして詩を書いた本人に気に入られることで、己は某先生の心強い味方だと周りに吹聴し、ついには己まで偉くなった気になっている。

まったく、何でこんなことになってしまったのやら。